

愛情の香り

鶴木マキ

新年に買った福袋の中に薔薇の香りのルームフレグランスがあった。ふだん部屋に香りを置くことはないのですが、こんな機会がないと手にすることはなかった。新年に新しい試みと思い、玄関にそのルームフレグランスを置いてみた。日を追うごとに薔薇の香りが増し家族の反応はふたつに別れた。

薔薇と言えば求婚の時贈られる花のイメージがある。愛情の花だ。求婚する時には情熱と勢いが必要だから衝動を持つ人にとって、薔薇は魅力的なものではないだろうか。香りの中にも欲動的なものを感じさせるものがないだろうか？薔薇の香りを好む派と好まない派があり、香りの好みと人の性格に共通点がある気がした。

「うわ、なにこの濃い匂い」

これは主人と次男。ふたりと会話をしていると余計なことを言うと思われ。何度も繰り返し同じ会話をしようものなら、その話は何回目、と言われる。話をまとめてから会話する彼らは、そのひとことが私を悲しませていと気がついていない。

女性というものは時に考えながら話す。理路整然とした話を好む彼らは会話をしている間に必ずオチを求め。なんだかよく分からないモヤモヤとする会話をしていると時間の無駄だと思ふ様子で途中から聞いていないか

「で、何がしたいの？」

と突然言葉を遮られる。私としては会話が少ないので、言葉を引き出したくて無駄なおしゃべりをするところがあるのは認める。でもそれはこちらが全て悪いのだろうか？

こんなふたりではあるが、どうしたら他者との関係が円滑に行くか常に考え行動をするので、周囲からの評判はすこぶる良い。あれだけまわりに気を配る繊細さを持ち合わせていながら身内に対しては普段気を使わない。それはこちらに対して甘えているからなのだろうかそんな愛情表現、分かりにくい。

しかしそうは言っても、いざという時には頼りになる。ここは手を貸す時と心得ていて手助けしてくれる。それはきちんところちらを気にしているからできる行動であり愛情表現なのだろう。

「あー、いい香り」

これは長男とたまたま遊びに来た妹のセリフ。ふたりは感情表現が豊かだ。共感力も高い。長男も妹も私同様会話しながら考える。だから多少同じような話をしてもあいづちも返してくれるし

「だからどうしたの？」

などという主人や次男と違って、きちんと最後まで会話に付き合ってくれ。その上ときに話した会話を纏めてくれる。こんなことを言って文句をいわれそうだと、思わず口にせず我慢するという主人たちとの会話のストレスは感じないでいい。気持ちも楽で話も切れることなく盛り上がる。大変楽しい会話なのだが少しだけ気になることがある。

それは考えたそばからしゃべるので収集がつかなくなる時と、たまに口喧嘩の状態になるとお互い平行線でいいあう形になること。結局どちらかがしんどくなって話さなくなるのでモヤモヤして終わる。その場その場で話すので、どこで何を言ったのか言っていないのか判断が難しいこともある。甘え方は「お互い様だから」と思っている様子で、言ったことが不快になったとしても最後は「あいつもいいやつだから」と許すことを期待をしながら話すところがある。これらは私にとっては分かりやすい甘えであり愛情表現だが、この態度をはつきりさせるところはいかにも西洋的な表現方法だと感じる。静かに愛を表現する昔の日本では薔薇の花を贈らない。雅やかな愛の花はなんだろう、と考えると桜か梅か、手折って渡すというよりそのものを愛でるのではないだろうか？香りはもつとほのかに。……そう、ほのかに。

薔薇の香りも時間経過とともにほのかになる。激しい愛も経年変化で穏やかな愛に変わっていくのかもしれない。

半月ほど玄関に置いていたルームフレグランス。香りがほのかになる頃には主人も次男も何も言わなくなっていた。